

早期前立腺がん 手術不要？

経過観察でも死亡率に差なし

米医学誌に発表

検診で見つかった早期の前立腺がんは、手術をしても、手術をせずに経過観察しても、死亡率に差はないとの調査結果を米国のグループがまとめ、米医学誌「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン」に発表した。

前立腺がん検診は、前立腺で作られて、がんになると

と血中にもれるたんぱく質「PSA」の量を調べる。無症状の小さながんを見つけていることができるが、すぐに進行せず、寿命に影響しないがんも多い。手術によって性機能が失われるなどの不利益もあり、有効性が世界で議論になっている。

研究グループは、1994年から2002年にPSA検診でがんが疑われ、転移のない前立腺がんが見つかった患者731人を、手術群と経過観察群に分けて2010年1月まで追跡した。経過観察群も症状が悪化したケースは手術した。

その結果、全体の死亡率は手術群が47・0%、経過観察群が49・9%と、統計的に意味のある差はなかった。前立腺がんによる死亡率も5・8%と8・4%で有意な差はなかった。ただ、PSA値10以上と高かった人に限れば、手術で死亡率が有意に低下した。

国立がん研究センターの浜島ちさと室長は「北欧の研究では早期でも手術の有効性が出ていたが、PSA検診が普及し、より早期のがんが見つかる米国では有効性は確認できなかった。医師は患者に様々な研究結果があることを伝え、治療法選択の判断材料にするべきだ」と話している。

国内では、前立腺がん検診の効果を巡り、「証明された」とする日本泌尿器科学会と「まだ証明されていない」とする厚生労働省研究班との間で議論が続いている。